

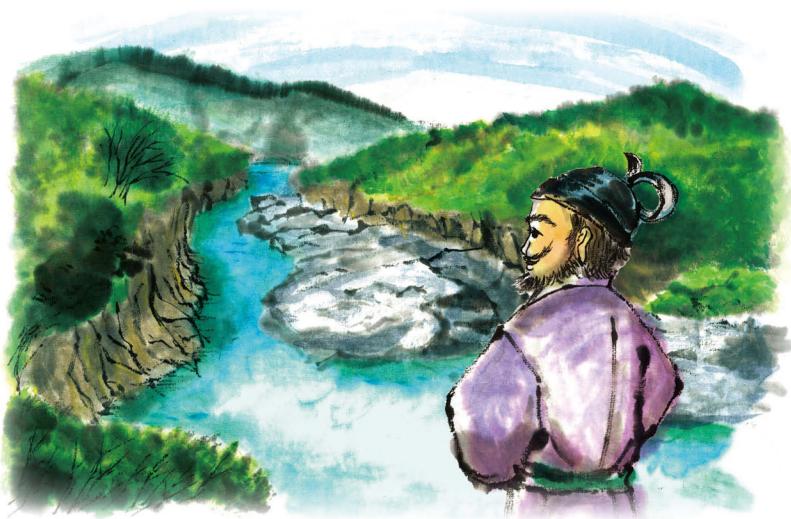
万葉集

[vol.57]

はじめての



吉野 よく見よ



訳 立派な人がよい所としてよく見て「よし(の)」と言った、この吉野をよく見るがいい。立派な人もよく見たことだ。

よき人のよしとよく見てよしと見ひし 吉野よく見よよき人よく見つ

天武天皇 卷一 二七番歌

この歌は天武天皇が詠んだ歌で、『万葉集』には天武天皇八(六七九)年五月五日に吉野宮に行幸した際の歌だと記されています。

『日本書紀』によると、その年五月五日に吉野宮へ行幸したこと、翌六日に草壁皇子・大津皇子・高市皇子・河島皇子・忍壁皇子・芝基皇子の六皇子らと争いをせずお互に助け合ふと盟約したこと、が記されています。

このときの行幸先だった吉野とは、壬申の乱で大海人皇子(後の天武天皇)が兵を挙げた地でもありました。壬申の乱とは、天智天皇の息子の大友皇子と弟の大友皇子との間に起こった皇位継承争いです。天智天皇が亡くなる前に、大海人皇子は皇位を継ぐ気は無いことを示すため出家して吉野に隠遁したといいます。それでも天智天皇亡き後に争いが起き、大海人皇子は吉野で挙兵、各地を転戦しながら味方を増やし、大友皇子側に勝利した、と乱の経緯がこ

と細かに『日本書紀』に記されていることでも知られます。

この歌はまるで早口言葉のようで、繰り返し声に出すと面白く感じますが、ふざけていたのではなく「よし」という言葉を重ねることに意味があったとみられます。

下市中央公園内にある「拓美の園」には、上で紹介した歌を含め、16基(23面)の句碑歌碑が立ち並んでいます。拓本は伝統的な器物を複写する方法のひとつで、拓美の園には、多くの人が採拓(拓本を採ること)に訪れます。

当時はひらがなやカタカナがない時代でしたので、元々は「淑人乃 良跡 吉見而 好常言師 芳野吉見与 良人四來三」と、外来の文字であった漢字で書かれ、六種類の「よし」が記されています。歌を記したのが別人であつた可能性はあります、少なくとも「よし」の繰り返しには、自らの出発点となつた吉野の地と自らの治世を言祝ぐ意図があつたと考えられます。

壬申の乱を経た後だからこそ、息子たちを集めて吉野で盟約を結び、こうした歌を詠む必然性もあつたといわれています。

(本文 万葉文化館 井上さやか)



※採拓には事前申込が必要です。希望者は下記へ。

問 下市中央公園管理事務所
☎ 0747-52-8965
(火・水曜日、祝日の翌日、年末年始は休み)

問 県広報広聴課 ☎ 0742-27-8326 FAX 0742-22-6904

万葉ちゃんの
つぶやき



和歌に
関連するものを
紹介するよ!

拓美の園